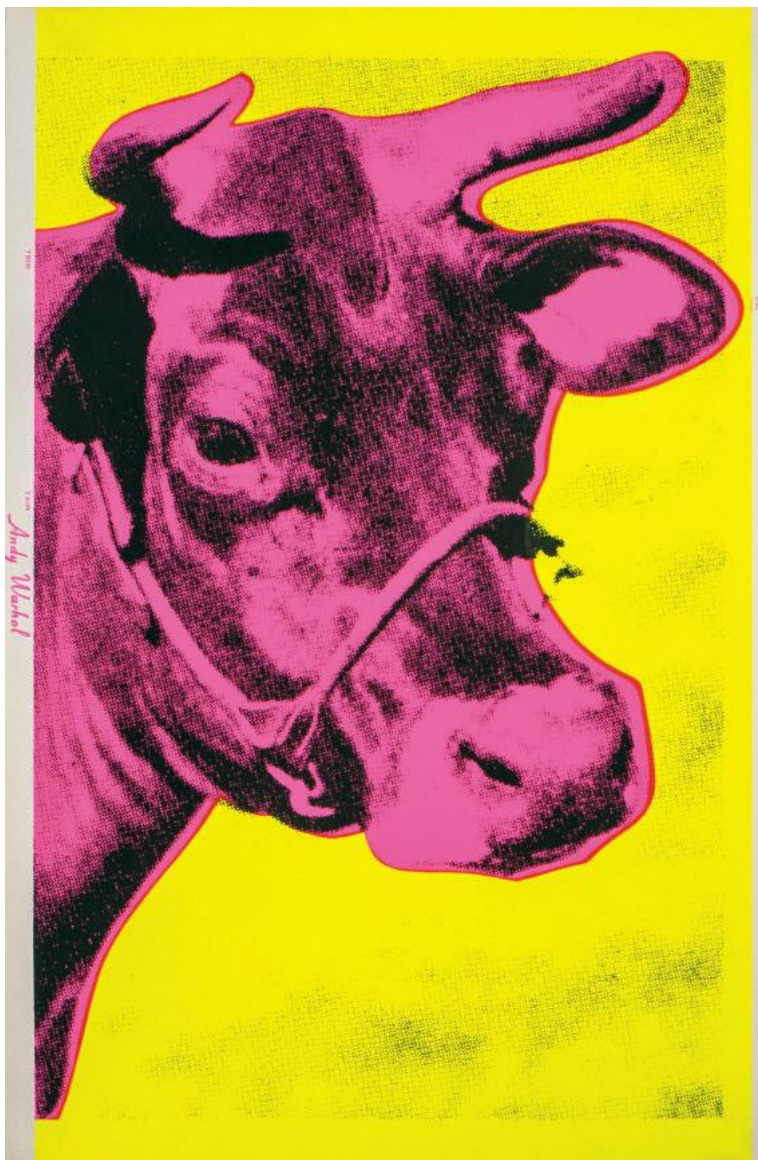
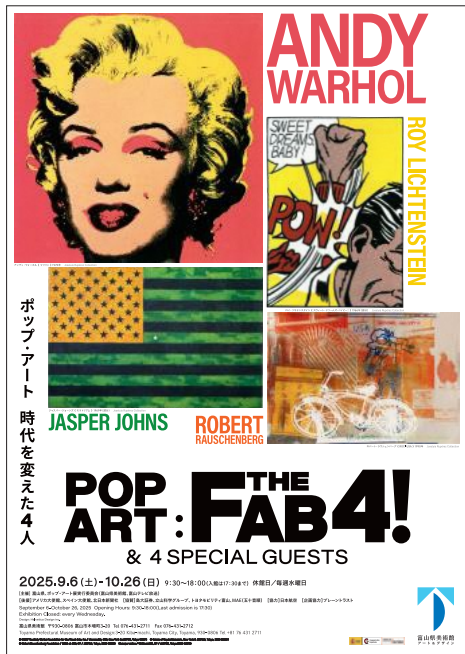




POP ART: THE FAB4! & 4 SPECIAL GUESTS



アンディ・ウォーホル《マリリン》1970 © 2025 The Andy Warhol Foundation for the Visual Arts, Inc. / Licensed by ARS, New York & JASPAR, Tokyo B0939
ジャスパー・ジョーンズ《モトラリアム》1969年 (部分)
ロバート・ラウシェンバーク《ROCI USA》1990年
ロイ・リキテンシュタイン《スワート・ドリームズ・ペイビー!》1990年 © Estate of Roy Lichtenstein, New York & JASPAR, Tokyo, 2025 B0939

ロイ・リキテンスタイン(1923-1997)、アンディ・ウォーホル(1928-1987)、ロバート・ラウシェンバーグ(1925-2008)、ジャスパー・ジョーンズ(1930-)はポップ・アートを牽引した、アメリカを代表する作家たちです。彼らは戦争や社会問題が巻き起こっていた激動の時代において、ポピュラー・カルチャーやロック音楽との関わり



ロイ・リキテンスタイン《キスV》1990年



アンディ・ウォーホル《ザ・ビートルズ》1980年

本展はスペイン出身のコレクター、ホセリス・ルベレス氏のコレクションから8人の作家をメインに、約120点の版画、ポスター、服飾を展示します。ルベレス氏のコレクションを通して、本展では同じ1960年代に脚光を浴びたザ・ビートルズになぞらえて「ザ・ファビュラス・フォー（FAB 4=素晴らしい4人）」と呼ぶ、リキテンスタイン、ウォーホル、ラウシェンバーグ、ジョーンズの4名の作品を中心に、時代を変えたポップ・アートの軌跡をご覧いただけます。

POINT

1960年代のアメリカの社会や文化から作品を見る

ポップ・アートは1950年代半ばのイギリスを発祥とし、その後1960年代のアメリカで最盛を迎えた動向でした。商業広告や量販品のパッケージなど日常生活の中のイメージを取り込んだその鮮烈なヴィジュアルは、同時代の音楽や映画、ファッション、グラフィック・デザインに大きな衝撃を与えました。ポピュラー・カルチャーそのものを革新していったポップ・アートとその作家たちに1960年代のアメリカの社会や文化から迫ります。

ポップ・アートの代表的な4名の作家から、ポップ・アートの真髄に迫ります。

フルカラーコミックの一コマを一枚の絵画に仕立てたりキテンスタイン、有名人のポートレートやスूप缶を繰り返し描くことで大量生産・大量消費社会のあり様を表現したウォーホル。彼らの先駆けとなったのが、新聞や雑誌から採られた写真や広告をコラージュしたラウシェンバーグ。そして標的や国旗といった記号や、日用品をモチーフにしたジョーンズでした。この二人により、日常生活にありふれたイメージを新たな意味に置き換え、誰もが分かる普遍的な表現を目指したポップ・アートが生まれていきます。

4 Special Guests

本展ではさらに、ロバート・インディアナ、ジェームズ・ローゼンクイスト、トム・ウェッセルマン、ジム・ダインといったポップ・アートを担ったこれらの作家らを「特別ゲスト」として紹介し、ポップ・アートの広がりや作家同士のコラボレーションを見ていきます。そしてラウシェンバーグ、ウォーホル、リキテンスタイン、インディアナ、ダイン、ローゼンクイスト、ウェッセルマンたちがコラボレーションした唯一の詩画集<ワン・セント・ライフ>から、ポップ・アートの多彩な表現とその精髓をご覧ください。

開催概要

開館時間 9:30~18:00 (入館は17:30まで)
休館日 毎週水曜日
会場 富山県美術館 2階 展示室3, 4
主催 富山県、ポップ・アート展実行委員会
(富山県美術館、富山テレビ放送)
後援 アメリカ大使館、スペイン大使館、日本新聞社
協賛 島大証券、立山科学グループ、
トヨタモビリティ富山、MAE (五十音順)
協力 日本航空
企画協力 プレントラスト
観覧料 一般1,500円 (1,300円)、
大学生1,000円 (800円)、高校生以下 無料
※()内は20名以上の団体料金

関連イベント情報

ギャラリーツアー

日時:10月4日(土)、10月18日(土) 各回14:00~14:30

展示室内限定配信 MUSIC トリビュートto PopArt

ホセリス・ルベス氏の選曲による本展出品作品と組み合わせたい洋楽プレイリストを公開します。ビートルズやローリングストーンズなどポップアートが勢を持ったこの時期の熱気がよみがえります。

※お手持ちの端末に音楽配信アプリ「Spotify」を通して、お聞きいただけます。

カフェ・レストランコラボメニュー

本展出品作品、作家からインスピレーションを得たオリジナルメニューを期間限定販売します!

オープンラボ「うつつて つくる ポップ・アートステッカー」

企画:平野 暉 ひらの・ひかる (グラフィックデザイナー)

8月28日(木)~10月28日(火)

10:00~12:00/14:00~16:00 (所要時間:20~30分程度)

関連グッズ「キャンベルスूप缶」販売中!

会期中、沖縄地域でのみ販売されているクラシックなラベルデザインのキャンベルスूप缶を当館1階ショップにて販売します。

※在庫状況により、予告なく販売終了となる場合があります。

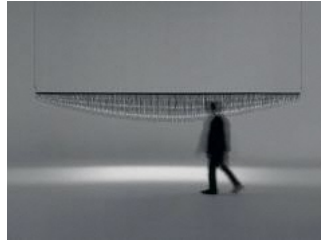
※内容は予告なく変更になる場合があります。

※会期中のイベントの詳細は、当館ホームページやSNS等をご確認ください。

キャンベルスूप缶(沖縄地区限定販売商品)
®Registered trade mark of the Campbell Soup Company.
Made under licence for Campbell Japan Inc.



DESIGN with FOCUS デザイナーの冒険展



上段左から 後藤映則「Heading in flux」、進藤 篤「LIMINAL」
下段左から 光井 花「PIXEL WEAVE」、氷室友里「BLOOM collection」

「デザイナーの冒険展」は、20代から40代のデザイナー、アーティスト、建築家など、これからの時代を切り拓こうとする11組のクリエイターによる展覧会です。

20世紀は、素材や技術開発を軸に大量生産を実現し、社会は大きな発展を遂げました。私たちの暮らしもその恩恵を受けましたが、21世紀に入って状況は一変しました。デジタル技術の急速な進化により社会の仕組みは大きく変わり、さらに近年では資源の枯渇や環境問題への対応として、循環型社会（サーキュラーエコノミー）への移行が強く求められています。

このような時代の変化のなかで、クリエイターたちはこれまで以上に多角的な視点と責任感をもって創作に向き合っています。

本展では、既存の枠にとらわれず、実験的で独創的なアプローチを通じて、創造性の可能性を拡張しようとする若きクリエイターたちの挑戦を紹介します。多様な課題に真摯に向き合い、柔軟に前向きに、楽しみながら取り組む彼らの姿勢は、これからの時代を照らすヒントに満ちています。

開催概要

会 期 2025年11月8日(土)ー2026年1月25日(日)
休 館 日 水曜日、11月25日(火)、12月29日(月)～1月3日(土)、1月13日(火)
会 場 富山県美術館 2階 展示室3、4
主 催 富山県美術館、北日本新聞社、北日本放送
観 覧 料 一般1,300円(1000円)、大学生650円(500円)、高校生以下無料、一般前売り1000円 ※()内は20名以上の団体料金

会期中に様々なイベントを予定しています。詳細は決まり次第、当館ホームページやSNS等でお知らせします。



上段左から 山本大介「FLOW PAINTING」、三好賢聖＋青沼優介「光をそそぐ」、本多沙映「Rebuilding Ocean Hue」
下段左から 松山真也(siro)「しっぽはすごい」、MAI SUZUKI「黒木舞」、高野洋平＋森田祥子 (MARU, architecture)「トンネルをくぐって」

出品作家（敬称略）

高野洋平＋森田祥子 (MARU, architecture)、氷室友里、光井 花、本多沙映、三好賢聖＋青沼優介、松山真也 (siro)、
山本大介、進藤 篤、MAI SUZUKI、後藤映則、特別展示：鈴木啓太 (PRODUCT DESIGN CENTER。JR城端線・氷見線の新型車両デザイナー)

POINT

自由な思考と実験的アプローチ

既存の技術や生産システムを再考し、自由な思考と実験的なアプローチで取り組みます。その背景には、手仕事に根ざしたクラフト的な視点が見てとれ、そこから生まれる偶発性も魅力として捉える姿勢も感じられます。

拡張する領域への飽くなき挑戦

クリエイターの手がける領域は、生命科学や身体、さらには宇宙空間にまで広がっています。近年、彼らが取り組む聴覚や視覚といった未知の領域も、10年後には現実の技術として実装される可能性を秘めています。

環境問題に向けた逆転の発想

クリエイターによるアップサイクルの取り組みには、廃棄物を有用な資源と捉え直し、新たな価値を生み出そうとする姿勢が見られます。現代社会が直面する問題に対して、既存の常識を覆す逆転の発想で立ち向かいます。

「宮城県美術館コレクション 絵本のひみつ展」関連イベント

ワークショップ「切り絵でつくる 富山のいきもの」

2025年8月2日(土) 14:00~15:30

講師：いわたまいこ（絵本作家、切り絵作家）

企画展「宮城県美術館コレクション 絵本のひみつ展」の関連イベントとして、切り絵作家・絵本作家のいわたまいこ氏をお招きして、「絵本のひみつ展」に出品されている原画でも使われている、切り絵の技法を体験するワークショップを実施しました。昆虫や動物、植物、菌類など様々な生き物の切り絵を制作してきたいわた氏。今回はいわた氏の丁寧な指導のもと、参加者10名が富山県の鳥ライチョウの切り絵を体験しました。ライチョウの毛並みや嘴などを切り絵用の小さなハサミで切っていきます。細かな作業が続きましたが、参加者の皆さんは集中して取り組んでおられました。専門的な技法にふれる体験を楽しんでいただけたのではないかと思います。



アトリエからのお知らせ

富山県美術館 令和7年度 アーティスト@TAD 環ROY&柏木美月 Fine Game in TAD



環ROYパフォーマンス「Fine Game」(宮崎県立劇場、2022年) 撮影：伊達忍

アーティスト@TADは、国内外で活躍するアーティストを富山県美術館(TAD)に招き、ワークショップなどを通して、当館に集う人々も交えたプロジェクトをTADギャラリーでの展示へと繋ぐ企画です。

今年度は、ラッパーの環ROY氏とグラフィックデザイナーの柏木美月氏がタッグを組みます。まず、環ROY氏が参加者たちと言葉を繋ぐ参加型パフォーマンス「Fine Game」を10月19日(日)に開催します。即興でつなぐ言葉から思いもよらないイメージを浮き上がらせていくこのゲームが、どんな展示へと繋がるのでしょうか。参加型パフォーマンスと今後の展示の詳細は、当館HP等で順次お知らせします。

開催概要

参加型パフォーマンス「Fine Game in TAD」

日時・会場：10月19日(日) 2階 ホワイエ (観覧無料)

※イベントに参加をご希望される方は、要事前申込。詳細は当館ホームページをご確認ください。

展示は2026年3月下旬からの予定です。詳細は順次お知らせします。

まるごとTADこども美術館

アートリバー：あそびでめぐる20世紀のアートとデザイン

2026年1月15日(木)～4月21日(火)(予定)

まるごとTADこども美術館とは？

美術館を全部“まるごと”つかって、こどもたちが作品を「みる」ことや「つくる」ことを通じて美術館やアートに親しみをもってもらうことを目指したプログラムです。

期間中は、「美術館デビューしたい」親子から、「アートってどうみるの?」と思う大人まで、いつでも、どこでも、だれでも参加できる楽しいイベントを開催しています。冬の美術館にぜひお越しください。



招待アーティストが決定！

原倫太郎＋原游（アーティストユニット）

プレイグラウンドをテーマにした体験型作品を制作している。主な展覧会に2012、2015、2022、2024年「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」（新潟）、2019、2022、2025年「瀬戸内国際芸術祭」（香川）、2023年個展「つくりかけラボ[RE 幼年期ディスカバリー]」千葉市美術館（千葉）、2025年個展「パベルが見る夢」太田市美術館図書館（群馬）など。近年は芸術祭においてキュレーションも担当。2008年絵本「匂いがかがれるかくや姫～日本昔ばなしRemix～」が文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門において奨励賞を受賞。



まるごとTADこども美術館＋ イメージスケッチ



原倫太郎＋原游《越後妻有立体双六》

まるごとTADこども美術館のロゴを紹介します！

デザイン：新村則人（グラフィックデザイナー）

「かじる」という言葉には、「かたい物の端を歯でかむ」というだけでなく「物事の一部分を学ぶ」という意味があります。子どもの頃にアートや芸術を少しかじって欲しいなという思いを込めてTADの「T」の文字を、1口かじったマークにしました。アートや芸術は難しいものではなく、子どもの頃から接していれば、身近な存在になっていきます。そのような子どもが育てば、感性豊かな人に育ち日本や世界が、豊かで平和になっていくと信じています。



まるごとTAD
こども美術館

杉戸洋《the pedals》(2014年)

キャンヴァス・アクリル絵具、顔料 200.7×365.8 cm



縦約2m、横約3.7mの大画面の作品である。中央には淡いグレーの空間が広がり、両端にはページュのカーテンのようなものが描かれている。よく見ると、下部には水平線が見られ、その中央には小さな三つの棒状のものが、ピンク、オレンジ、水色の炎のようなものが出ている。上部には白や黄色で着色された部分があり、光の粒のように輝いて見える。作品の大部分を成すグレーは均一ではなく、上部には半円状の暗い部分があり、色が幾重にも塗り重ねられ、全体が薄いベールに包まれているようだ。幻想的な色彩でシンプルな形態が描かれ、まるで夢のなかにいるように、あるいは映画の一場面のようにも感じる作品だ。

作者の杉戸洋は、1996年の初個展以来、カーテンのある窓からの風景を多く描いている。窓枠からは山や海、空や泉、塔、宇宙などが登場してきた。ファンタジーとリアル、どちらの表現が好きかという質問に、杉戸は「両方。絵を描くときも、希望と絶望をさまよっているから」^{註1}と答えているが、見るものは、そこにファンタジーでありながら、リアルな世界の存在を重ねあわせ、詩的でありながら孤独感を湛える、杉戸独特の絵画の魅力に誘われることになる。

本作のタイトル《the pedals》について、杉戸に尋ねたところ、作品はアンリ・マティスの《ピアノのレッスン》(1916年／ニューヨーク近代美術館所蔵)から着想を

得ているという。この作品には、大きな窓枠とピアノ、少年が登場するが、杉戸はこの中のピアノの譜面台の文字(PLEYEL)が逆向きに描かれていることに関心をもち、少年の視点からの風景を作品に取り入れた。つまり《the pedals》は、ピアノのペダルであり、画中の三つの棒状のものはペダルだったのだ。静かで優しい印象を持つ、中央の空間のグレーはマティスのグレーにつながっていた。

幼稚園から中学2年まで、ニューヨークで過ごした杉戸の楽しみの一つは、メトロポリタン美術館やニューヨーク近代美術館で作品を見て過ごすことだった。帰国後、美大の日本画科に入り、自分に嘘をつかない表現を追求し、さまざまな表現を試みたという。その後、ありのままの自分を映し出そうと、夢のイメージを描く絵画へと展開していった。マティスは杉戸が2003年頃から特に関心を抱いている作家であり、構成されている色面や形、線、掻き落としや塗り重ね、塗り残しの表面など、制作のプロセスも含め、マティスにつながる絵画の魅力を改めて模索したのではないだろうか。絵画を新たな視点でとらえつつ、杉戸独自の世界観が繰り広げられている作品である。

※註1 「美術手帖」1998年9月号、1998年発行、美術出版社、110頁

富山県美術館 主幹・普及課長 麻生恵子

富山県美術館 (TAD)

〒930-0808 富山県富山市木場町3-20 (富岩運河環水公園内) Tel.076-431-2711 Fax.076-431-2712 <https://tad-toyama.jp/>

表紙: アンディ・ウォーホル《牛》1971年 Joseluis Rupérez Collection

©2025 The Andy Warhol Foundation for the Visual Arts, Inc./Licensed by ARS, New York & JASPAR, Tokyo B0939

2025年9月発行